

KCSES※ *News Letter No.26*
MARCH 2011

※英文学科では2010年度より、本学会の内容のいっそうの充実を図り、広く在学生・卒業生の集える場とするために、本学会英語名称をKobe College Society of English Studies (KCSES)と改めることと致しました。

第35回神戸女学院大学英語英文学会 (KCSES) 大会報告

2010年度KCSES委員長 David McCullough

A university is a place for deep thought, a place where many thinkers can meet to share knowledge and learn together. That is the spirit of the Kobe College Society for English Studies – a forum for the teachers, graduate students and graduates of Kobe College to share our common interest in the world of English.

The 35th annual meeting of the Society was held in L-28, as usual on the last Friday of November. We were pleased to have many students, teachers, graduate students, alumni of the English Department and members of the public in attendance. This year's keynote lecture was given by Stephen Henry Gill, a well-known British poet who has produced many radio programmes for the BBC about Japan. The talk, entitled 'Bringing Japanese Images to the World', provided the audience with many vivid examples of how Stephen Gill had educated his listeners about the glories of Japanese culture. Playing extracts from his radio programmes and reading a selection of international haiku, the speaker explained how he had been able to concretely explain Japanese poetry, religion, art and daily life to the listeners of the BBC.

The Society meeting also featured three short presentations from graduate students and an alumnus of the English Department. The first presentation, by Okita Kae, focussed on Bridge to Terabithia by Katherine Paterson. The second presentation, by Tanaka Mariko, explained the process of 'Inclusive Education' in Japanese schools. The final presentation, by Yamawaki Noe, outlined the life of Abe Masa, an early

graduate of Kobe College. The standard of the presentations was very high and we look forward with anticipation to forthcoming events.

特別講演

**BRINGING JAPANESE IMAGES TO THE WORLD
— OF INSECTS, RAIN, STREET HAWKERS, A
BELL AND A HORSE —**

詩人、英国放送協会プロデューサー、
英国俳句協会会員

Stephen Henry Gill

The motto of haiku is "Show, don't tell." For 20 years or more, I have been trying through radio programmes broadcast on the B.B.C. to introduce aspects of Japanese nature and culture to Britain, but I have always been aware that showing is much better than telling. For example, rather than telling the audience all about the habits, size and diet of a suzumushi, how much better it is to listen to one and read a haiku like this:

にぎやかな乞食の床や蟲の声

How bright and lively

Is the bed of the beggar –

Crickets cry.

(Chiyo-ni)



So what sort of images are the British likely to be interested in? We have four seasons, quite like

those of Japan, although they say that in Britain you can experience them all in a single day! Some enjoy, for example, the quiet bleakness of late autumn and winter:

And the red reynard (fox) creeps
To his hole near the river,
The copper leaves fall
And the bare trees shiver.

(Osbert Sitwell)

So seasonal images are liked by us, and Japan has lots of them! In one of my programmes, I used this beautiful image by Gyodai together with gagaku music and the sound of whales singing!

暁や鯨の吼える霧の海
By the clear light of dawn
Whales frolic,
Whining, bellowing
In the frosty sea.

To tell a good story, it is sometimes necessary to have a hero, and in one programme the hero was a little uguisu, or bush-warbler. The changing seasons were felt as they affected the warbler's territory, and a nice relationship was built up with a man living in the nearest house.

Another animal, on which I once made a programme was the horse. In Britain we love horses, and they are treated very well, but in my researches about the Japanese horse, I soon realized that they were used not so much to ride as to carry things through the mountains (packhorses)... and to eat, too! Nowadays there are not many horses in Japan, but when the first Westerners arrived in Meiji, there were plenty. Isabella Bird, an intrepid British female traveler and writer, left us many anecdotes about problems she had with horses in Japan! But for a vivid image, I again turned to haiku, and especially to senryu:

笠を食う馬の口にもあるリズム
In the mouth of a horse
Munching a straw hat,
There is also
A certain rhythm!

When it comes to inanimate things – telegraph poles, scarecrows, and temple bells, for example – I found that Japanese also regard these as having a life of their own! In Britain, things are just things...

Ash on an old man's sleeve
Is all the ash the burnt roses leave.

(T.S.Eliot)

Interviewing a bell-founder in Kyoto for a programme recently made me realize that a bell is not just a mixture of copper and tin, but that it also has a divine role. "A Sacred Bell resounds in the three worlds, not just one – those of the past, the present and the future."

Making radio programmes leads to so many opportunities to compare Japan's nature, culture and literature with those of my own country, and to meet some very special people. However many questions I may wish to ask an interviewee, though, the most important thing is just to listen: like a fisherman, I wait patiently to see what I might catch in my recording 'net'.

発表要旨

キャサリン・パターソンの*Bridge to Terabithia* におけるエンド・オブ・イノセンス

大喜多 香枝

神戸女学院大学大学院博士後期課程

本発表では、1977年に書かれたキャサリン・パターソン (Katherine Paterson) の *Bridge to Terabithia* において、悩みを抱える主人公が友人との死別という「イノセンスの喪失」となる経験の後に、死の受容と同時に直面していた困難をも克服し成長する様子について分析した。

1970年代の閉鎖的な片田舎で暮らす10歳の主人公ジェシー・アーロン (Jesse Aarons) は、父親と上手く親子関係を築くことができずに孤独を感じている。ジェシーには1970年代中頃までに生じた、これまでの制限された役割から解放された新しいタイプの男性像が反映されており、それに適応できない旧式の男性性を体現する父親は、息子をタフな男に育てたいためにジェシーがもつ絵画への興味を否定し、ジェシーも父親に認めてもらうためにレースで一等になろうとし、また恐怖心をもつことを恥じる。このようにジェンダーについての困難を抱える主人公は、都会から引っ越してきた風変わりな少女レスリー・パーク (Leslie

Burke) と友情を育み、二人は森の奥にテラビシアという架空の王国をつくる。レスリーはこれまで得ることのなかった知的好奇心をジェシーに与え、彼女が聞かせてくれる様々な物語は彼の想像力をより一層豊かにする。一方で、自然の驚異に対し無防備なレスリーは、やがて増水した小川に転落し命を落とす。世間知らずな子ども性を体現する彼女の死は、ジェシーから無知というイノセンスが象徴的に喪失されたことを意味する。またこの出来事は、死に接触したことの無いというイノセントな状態からの主人公の「転落」をも示唆する。

レスリーの死により絶望状態へと「転落」したジェシーは、否認・怒り・取り引き・抑うつ・受容という五つの過程を経て死の悲しみを乗り越える。このとき、ジェシーはこれまで直面していた男性性についての困難をも乗り越え、父親との関係を修復し、恐怖心を恥じることなく受け入れられるようになる。やがて、レスリーの死の悲しみを乗り越えたジェシーは、彼女の死んだ小川に橋を架け、妹のメイ・ベル (May Belle) を新しい王女としてテラビシアへと導く。

このように、*Bridge to Terabithia*は、ジェンダーの問題や死の受容という若者の成長過程における普遍的な問題を、想像力溢れる少年少女の友情物語に巧みに盛り込んだ作品であると考えられる。

発表要旨

Introduction and Future Perspectives of Inclusive Education for Newcomers

田中 真理子
和泉市立郷荘中学校教員

本研究は、ニューカマーに対する教育にインクルーシブ教育の理念がどのように発展的に用いられているのかを明らかにし、そこからわが国の多文化共生教育のなかで、インクルーシブ教育を行っていくには、どのような形があるのかについて考察したものである。日本におけるインクルーシブ教育への関心は、障害児教育に特化されている傾向が強く、本来その対象として含まれるべき民族的マイノリティや多文化共生教育にまで発展した実践的研究は今のところほとんど行われてはいない。

近年、わが国の公立学校に就学しているニュー

カマーの子どもたちが増加している。文化的背景を異にするニューカマーに対しては、これまで手探り状態のなかでの日本語指導や適応指導を中心とした様々な教育支援が行われてきた。しかしながら今日では、このようなニューカマーの子どもたちが一つの学校に集中して在籍する傾向がみられるようになり、学校全体でニューカマーの多様性を認め尊重する教育の在り方を模索することが喫緊の課題となっている。

そこで本論文では、インクルーシブ教育という新たな概念に注目し、Lipsky & Gartner (2006) による障害児を対象にしたインクルーシブな学校に共通してみられる10項目の特性と信念を分析の枠組みとして援用することで、大阪府立高校におけるケーススタディーを分析することを試みた。10項目の特性と信念とは、(1) 学校全体のアプローチ、(2) すべての子どもたちが学ぶことができる、(3) コミュニティ意識、(4) 場所よりむしろ必要に基づくサービス、(5) 自然な割合、(6) 支援は通常教育で提供される、(7) 教師間の協力、(8) カリキュラムの改編、(9) 指導方法の強化、(10) 標準と成果、である。これらの10項目の概念を援用することで、わが国の多文化共生教育のなかでインクルーシブ教育を進めていく際にも、これらの概念を用いることができるのか否かについて明らかにする。本調査は、大阪府立A高校において、2009年11月から12月にかけて行われ、調査対象は、渡日生担当教員、中国語専任教員、ニューカマー生徒(数名)であった。調査手法には、半構造化インタビュー及び参与観察を用いた。

調査の結果、Lipsky & Gartnerが述べるインクルーシブな学校に共通してみられる10項目の特性と信念すべてが、ニューカマーに対するインクルーシブ教育にも用いることができることが分かった。また、これらの10項目に加えて、インクルーシブな学校は、子どもたちと直接接する現場教員らの子どもたちのニーズに応じた教育を提供しなければならぬというボトムアップの要求によって可能になるという視点が導き出された。

以上のような結果から、わが国の公立学校においても、現場教員らが子どもたちを中心に据えることで、学校や教員委員会に働きかけ、ニューカマーの子どもたちにとって、インクルーシブな学校づくりを実現していくことが必要であると考える。

発表要旨

神戸女学院第一期卒業生阿部マサの半生を辿って

山脇 野枝

神戸女学院大学大学院博士後期課程

今回の発表では神戸女学院(当時・神戸英和女学校)を第一期生として卒業した阿部マサ(旧姓・伊藤1862年～1930年)の結婚までを区切りとする前半生についての調査報告を行いました。これまで幾度かに渡り本学院の卒業生に関する調査はなされているものの、マサは第一期卒業生であるにも関わらず、彼女に関する詳しい調査が行われてきませんでした。数少ない先行研究・調査は、親族の方たちによるもので秋田藩出身の彼女が神戸英和女学校と横浜共立女学校(現・横浜共立学園)に学び、英語教師となったことが明らかにされています。今回の発表ではこれまで収集した資料の紹介の意味を込めた報告をさせていただきます。

マサの生い立ち、また当時非常に珍しかった彼女のミッション系の女学校2校に在籍・卒業したという彼女の学歴を中心に、女学校卒業後に英語教師として働いたのち、阿部徳吉郎氏との結婚に至るまでを先行研究・調査を踏まえつつ、神戸女学院『学院史』、横浜共立学園資料集、また神戸女学院同窓会による『めぐみ』誌を交えながら紹介しました。彼女の父親が明治政府の役人であったということも彼女の生涯に大きな影響を与えたと考えられ、十代の始めに維新後父の上京を機に秋田藩を出ています。今回の調査では、マサが金沢女学校(現・北陸学院)の開校式に通訳として参会していたことが明らかとなりました。彼女が父の勤務地でもなかった北陸地方にいた理由としては、長老派が北陸への医療伝道隊に通訳者として参加したことが考えられます。また金沢教会の原簿では伊藤マサの名前が確認されており、これまで明らかとされてこなかった彼女のキリスト教への関わりを示すことになりました。しかしながら、北陸学院に残る史料とこれまで収集した資料では、マサの年齢や出身地などに差異があり、これについてはより詳細な現地調査・聞き取り調査の必要があります。

今後、個人的な研究テーマである、明治期を中心とした英語教育史の研究をしてゆく上で、通訳者・英語教師として活躍した人物を「神戸女学院」

という接点を持ちながら調査できることは、非常に楽しみです。引き続き、これらの調査・研究を続けてゆきたいと考えております。

英文学科卒業論文・プロジェクトコンテスト

2008年度から卒業論文および卒業プロジェクトのコンテストを開催することとなり、学生の応募を募っている。本年度は、全体で31名の応募があり、2月に英米文学、言語学、通訳・翻訳、グローバル・コミュニケーションの各部門で選考が行われた。最優秀賞受賞者、優秀賞受賞者は次の通り。なお、最優秀者の論文は、『英文学科卒業論文・プロジェクト論集』(2011年度春刊行予定)に掲載する。

英米文学

<最優秀賞>

該当者なし

<優秀賞>

該当者なし

言語学 (応募者数 12名)

<最優秀賞>

E07044 片柳光

<優秀賞>

E07064 町田亜矢

E07097 西端美帆

グローバル・コミュニケーション (応募者数 10名)

<最優秀賞>

E06067 増永彩

<優秀賞>

E06028 稲田朋

通訳・翻訳 (応募者数 6名)

<最優秀賞>

該当者なし

<優秀賞>

E07025 細川菜美

E07032 石丸陽子

E07092 仲野知恵里

キャンパスニュース

<2011年4月より就任>

*Nigel Duffield氏が、めぐみ教育基金客員教授として就任されます。

<訃報>

元英文学科教授 Cynthia J.N.Seton氏が、2011年1月19日ご逝去されました。享年67歳。天上の平安をお祈り申し上げます。

国際学会発表

* 別府恵子氏

フランス、The American University of Parisで開催された The Second International Conference of the European Society of Jamesian Studies (2010年10月21-23日)にて研究発表。

* 石川有香氏

京都キャンパスプラザで開催された ICTATLL 2010 (Society of ICT in Analysis, Teaching and Learning of Language) (2010年9月21-23日)にて研究発表。

ワルシャワ高等言語学院で開催された International Linguistic Conference in Warsaw (ILCW) (2010年10月19-21日)にて研究発表。

Universiti Putra Malaysiaで開催された Malaysia International Conference on Foreign Languages (MICFL 2010) (2010年12月1-2日)にて研究発表。

* 小杉世氏

キプロス共和国、ニコシアで開催された The 15th Triennial ACLALS Conference (2010年6月6-11日)にて研究発表。

インドで開催された国際会議 ChotroIII (Local Knowledge-Global Translations: The Imagination & the Images of Indigenous Communities in the twenty-first Century) (2010年9月11-16日)にて研究発表。

* 栗栖和孝氏

イギリス、Oxford大学で開催された The 20th Japanese/Korean Linguistics (2010年10月1-3日)にて研究発表。

* 田辺希久子氏

中国、マカオで開催された FIT Sixth Asian Translators Forum (2010年11月6~8日)にて研究発表。

* 立石浩一氏

Singapore Management Universityで開催された The 5th International Conference on Origami Science, Mathematics, and Education (2010年7月13-17日)にて研究発表。

* 鞆野ひろ子氏

英国、オックスフォード大学で開催された the 7th International Conference of the Emily Dickinson International Society (2010年8月6-8日)にて口頭発表。

大学院生による学会発表

* 真木ジュリア氏

西宮市大学交流センターで開催された日本通訳翻訳学会関西支部例会 (2010年12月4日)にて研究発表。

* 南條恵津子氏

香港中文大学で開催された the Fourth Asian Translation Traditions Conference (2010年12月15-17日)にて研究発表。

西宮大学交流センターで開催される日本通訳翻訳学会関西支部例会 (2011年3月27日)にて研究発表予定。

記念賞

2010年度、以下の学生に対して、次の学内の記念賞が授与されました。

佐々城きく(女32C36)記念賞 E08151 植村 温子

デフォレスト記念賞 E08015 後藤 彩未

丹部トモ(C41)記念賞 GE0932 河本 尚子

会員による出版紹介

- ◇東森勲氏 『認知と社会の語用論：統合的アプローチを求めて』（ジェフ・ヴァーシューレン著、東森勲監訳、ひつじ書房、2010年6月刊）
- ◇石川有香氏 『観光英語で日本発見』（河原俊昭著、他7名共著、英宝社、2010年2月刊）
“Corpus, ICT, and Language Education”（共著、University of Strathclyde Publishing、2010年9月刊）
『英語教育と文化』（塩澤正、吉川寛編、共編著、大修館書店、2010年11月刊）
『言語研究のための統計入門』（石川慎一郎、前田忠彦、山崎誠編、小林雄一郎、高見敏子、中尾桂子、水本篤著、共著、くろしお出版、2010年12月刊）
- ◇松尾歩氏 『CD BOOK はじめての海外出張・留学・赴任で使える英会話フレーズブック』（アスカカルチャー、2010年10月刊）
- ◇齋藤安以子氏 『英語研究と英語教育』（岡田伸夫・南出康世・梅咲敦子編集、共著、大修館書店、2010年12月刊）
- ◇田辺希久子氏 『日本の翻訳論—アンソロジーと解題』（柳父章、水野的、長沼美香子編、共著、法政大学出版局、2010年9月刊）
- ◇立石浩一氏 『エリック・ジョワゼル：折り紙のマジシャン』（エリック・ジョワゼル著、山口真編、立石浩一訳、おりがみはうす、2010年11月11日刊）
- ◇鞆野ひろ子氏 『エミリ・ディキンソンの詩の世界』（新倉俊一編、共著、国文社、2011年3月刊）
- ◇吉田純子氏 『英語圏諸国の児童文学Ⅱ——テーマと課題』（共著、ミネルヴァ書房、2011年3月刊）

神戸女学院大学英語英文学会 会則

(1995年 4月 1日施行)
(2005年 9月22日改訂)
(2010年 3月 2日改訂)

- (1) 名称
本学会を神戸女学院大学英語英文学会と称する。
- (2) 目的
本学会は本学英文学科卒業生および大学院英文学専攻修士の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。
- (3) 構成
本学英文学科卒業生、大学院英文学専攻修士有志および本学英文学科教員、元英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。
- (4) 活動
年一回、英語英文学会大会を開催する。
Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英語英文学会その他の活動の内容を報告する。
その他。
- (5) (a) 上記の活動運営のために運営委員会をおく。
(b) 運営委員会は、学科長、学科会計委員と、若干名で構成されるものとする。

内規

- I. 大会での発表について
(1) 発表希望者は毎年7月1日までに、発表論文の簡単なレジュメと略歴を添えて、英文学科事務室まで申し込み、KCSES運営委員会で審査の上、決定する。
- II. 維持費・参加費について
(1) 在学生を除き学会参加者は参加費500円を学会当日に納入する。
(2) 英文学科教員は年に500円を維持費として納入する。
(3) 維持費・参加費の徴収、及び郵送料などの経費の支出は、学科の会計委員が担当する。
(4) (3)に関しては、KCSES専用の口座を利用する。

*今回、会則と内規に一部変更があります。変更箇所には下線を引いていますので、ご留意下さい。

編集後記

第35回大会という節目の年に、よりグローバル化した社会の実態を反映させるべく、KCSESはKCSESとして新たなスタートを切ることとなりました。今後とも何卒変わらぬご支援の程よろしくお願ひ申し上げます。

会員消息・出版物のご連絡、ありがとうございます。会員の皆様のご協力に感謝申し上げますと共に、今後の益々の研究の発展をお祈り致します。

KCSES Newsletter 編集委員

(2010年度運営委員)

○David McCullough ○立石浩一 ○山田由美子 (ABC順)

KCSES Newsletter No. 26

編集発行 神戸女学院大学英語英文学会

〒662-8505 西宮市岡田山4-1

Tel (0798) 51-8548 Fax (0798) 51-8532

<http://www.koberc.ac.jp/english/gakkai/gakkai.html>

2011年3月発行